

開催地名：愛知県知立市	
開催日時	令和3年2月28日（日） 10：00 ～ 11：30
開催場所	知立市中央公民館
語り部	山崎 義勝 （岩手県釜石市）
参加者	知立市消防団 約40名
開催経緯	近い将来、発生の可能性が高いと言われている南海トラフ巨大地震のような大規模災害に備え、消防団員の自助・共助意識の向上や避難所における消防団の役割と活動についての理解、若い消防団員への災害伝承を目的に、語り部による講演会を開催することとする。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>岩手県釜石市は製鉄業で発展し、ラグビーの強豪、新日鐵住金釜石を擁する「鉄と魚とラグビー」の町である。私は震災当時、釜石大槌地区消防本部消防長として勤務しており、釜石市の震度は6弱、マグニチュードは9.0であった。三陸沖で大きな地震が起きると30分後に津波がくると言われていたが、その通りの時間に高さ10m弱の津波がやって来た。釜石湾には深さ63mの世界一深い湾口防波堤があり、それで市街地を守ろうという計画だったが、津波はそれを一気に乗り越えた。押し寄せる津波で木造建築の建物は全壊し、市街地は積み重なる瓦礫で通行不能に陥った。</p> <p>（2）大津波警報発令と被害状況</p> <p>釜石市をはじめとする三陸沿岸地域では、江戸時代以降の大小の津波の襲来度数をみると6、7年に1度の割合で、また、古くからの記録によると40年～50年に1度の割合で津波が発生しており、政府の地震調査委員会によると、この30年以内に宮城沖で地震が発生する確率は99パーセントと非常に高くなっており、それにとמונau津波が発生する確率も当然高いものと考えられていた。釜石市には、ギネスブックにも登録された世界最大水深（63m）の湾口防波堤が31年の歳月をかけて2009年3月に完成しており、明治三陸地震津波規模の大津波に対して、湾内の防潮堤の天端高（おおむね4m）より低い水位に減水させることで市街地への浸水被害の拡大を防ぐ機能が期待されていた。</p> <p>しかしながら、東日本大震災では、設計外力を超える大津波の威力により、防波堤は大きく損壊し、津波は湾内の防潮堤を越え、ハザードマップで想定していた浸水域を大きく越えて被害が広がった。地震発生約30分後に襲われたこの津波により、一瞬にして約1,000人の命が奪われた。防波堤は一定の減災効果を発揮したことが認められたが、想定以上の津波だったことが伺える。</p>

また、マスコミでは釜石の奇跡と悲劇が報道された。奇跡は、釜石市の小・中学生が迅速に津波から避難し、約 3,000 人、99.8 パーセントの命を守ったことである。すでに下校していた生徒もいたが、それぞれ素早く避難した。釜石の小中学校では、日頃から防災学習カリキュラムや避難訓練を徹底しており、これはその成果であったと言える。一方悲劇の方は、鶴住居地区防災センターに避難した 166 人が亡くなったことである。この施設は実は避難所ではなかったが、名称から住民が誤解した。震災の 1 週間前に同施設で避難訓練が行われたことも誤解に拍車をかけ、東北の行政施設で最も多くの犠牲者を出した。やはり行政の住民周知は曖昧ではいけない。正確な情報を日頃から発信しておくべきである。

### (3) 被災状況と安全確保

釜石市の消防職員 108 人のうち、殉職者が 2 人出た。家族が犠牲となった職員は 19 人、被災家屋数は 41 棟に及んだ。釜石市消防団についても死亡者が 14 人（殉職者 8 人）発生した。あの時の記憶は、死ぬまで忘れないと思う。殉職者は絶対に出してはならない。

東日本大震災の際、地震発生後津波が押し寄せるまで 30 分程度の時間があつた。その間にできることは、基本的には高台に避難することのみであると考えていただきたい。消防職員であっても、限られた時間でできることは限られる。緊急事態発生時には、上からの命令ではなく、自分の判断で適切な行動ができるよう、日頃からイメージしておくことは極めて重要である。消防職員であっても自分の命を守ることを最優先していただきたい。



開催地より

豊富な映像を使って、東日本大震災の経過や防災対策に対する提言などについて、わかりやすくお話いただいた。備蓄食料の備え、的確な避難場所の確認、避難ルートの確認、家具の転倒防止、情報取得手段の確保等、本市として事前に対応できる自助の強化活動をさらに促進させていきたい。